

会計学研究における不正会計予測モデルの展開

首 藤 昭 信

目 次

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. 本稿の目的と構成 | 4. 機械学習と不正会計予測モデル |
| 2. 不正会計と利益調整 | 5. その他の研究 |
| 3. 財務比率と不正会計予測モデル | 6. 要約とディスカッション |

本稿の目的は、会計学の主要ジャーナルに掲載された不正会計の予測を主眼とする研究の展開を要約し、会計学研究と会計・金融実務に対するインプリケーションを提示することである。具体的には、不正会計予測モデルの学術的背景を確認した上で、財務比率に基づく予測モデル、機械学習を利用した予測モデル、そしてテキスト分析に基づく予測モデルなどの研究成果を要約する。

1. 本稿の目的と構成

会計情報の開示は資本市場の効率性を維持する重要な役割を担っているため、その信頼性を毀損する不正会計は資本市場の参加者にとって大きな問題となる。そこで本稿では、会計学の主要ジャーナルに掲載された不正会計に関する学術的知見を紹介することを目的とする。具体的には、不正会計の予測を主眼とする研究の展開を要約し、会計学研究と会計・金融実務に対するインプリケーションを提示する。

これまでの不正会計研究の体系を要約すると、主に四つの視点から研究が進められてきた。第一の視点は、不正会計を行う経営者の動機の解明である。経営者は、インセンティブ報酬契約に基づく報酬の獲得や資金調達コストの低減といった動機により、虚偽の財務報告を行うことが分かっている。第二に、不正会計を抑制（促進）する外生的な要因の特定も進められている。コーポレート・ガバナンスといった制度的特徴に注目し、例えば、取締役の独立性や専門性といった要因が不正会計の発生と関連を有することが分かっている。第三



首藤 昭信（しゅとう あきのぶ）

東京大学大学院経済学研究科 准教授。2002年に関西大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得。11年に神戸大学より博士（経営学）の学位を取得。専修大学商学部、神戸大学経済経営研究所を経て15年より現職。11年から13年までニューヨーク大学、2012年から2013年までイエール大学に客員研究員として在籍。著書に『日本企業の利益調整』（中央経済社、2010年、日本会計研究学会太田・黒澤賞）、論文に“Management earnings forecasts as a performance target in executive compensation contracts” *Journal of Accounting Auditing and Finance* 35、2020年（共著）などがある。